

特別支援教育研究論文集

—令和7年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

知的障害のある児童生徒における
「キャリア・パスポート」の作成・活用に関する実践的研究

青森県立八戸第二養護学校

教諭 松橋 孔亮

令和8年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

要旨

キャリア教育は、児童生徒が自己理解を深め、将来の社会的・職業的自立に向けた基盤を形成することを目的として、学校教育全体を通して計画的・継続的に行われるものである。その中で、2020年度より全国の学校で導入された「キャリア・パスポート」は、学習や学校生活を振り返り、自己評価や意思決定につなげるための重要なツールとして位置付けられている。

一方、特別支援学校（知的障害）においては、知的障害のある児童生徒の特性により、自己の経験や学習を振り返り、それを言語化・記述することに困難さが伴う場合が多く、「キャリア・パスポート」の作成および活用に課題が生じている。また、教員においても、キャリア教育や「キャリア・パスポート」に関する体系的な研修の機会が十分とは言えず、指導方法や評価の在り方に不安を抱えながら実践している実態が見られる。

このような背景を踏まえ、本研究では、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用に関して、教員が指導の過程で感じている成果と課題を明らかにするとともに、それらの課題に対応した支援の在り方について、教員研修および様式改善を通して検討することを目的とした。

研究は、令和6年度および令和7年度の2年間にわたり、段階的に実施した。令和6年度には、特別支援学校（知的障害）の教員を対象としたインタビュー調査を行い、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導に関する実践上の成果と課題を整理した。あわせて、調査結果を踏まえた教員研修を実施し、研修前後の質問紙調査を通して、教員の指導観や児童生徒の変容に対する実感の変化について検討した。続く令和7年度には、前年度の成果と課題をもとに、「キャリア・パスポート」の様式および運用の在り方に着目し、様式の検討および改善を行うとともに、改善後の様式に対する教員の捉え方を整理・検証した。

本研究の結果から、教員研修と様式改善を組み合わせた段階的な取組は、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用を見直す上で、有効な視点となる可能性が示された。また、本研究は、教員の意識や指導観への働きかけと、教材・様式といった指導の枠組みへの働きかけを関連付けて検討した点に特徴がある。これらの取組を通して、学校現場における実践の積み重ねをもとに、「キャリア・パスポート」の活用の在り方を検討するための基礎的な知見を得ることができたと考えられる。さらに、本研究で得られた知見は、各学校の実態や教育課程に応じた工夫や改善を検討する際の参考となる可能性がある。今後は、児童生徒一人一人の変容をより丁寧に捉える視点や、学部間・学年間での継続的な活用の在り方についても検討していく必要がある。また、学校全体として「キャリア・パスポート」をどのように位置付け、共有していくかという点も、引き続き課題として整理していくことが求められる。本研究は、知的障害のある児童生徒の実態に即したキャリア教育の充実に向けて、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用について整理・検討したものである。

キーワード：「キャリア・パスポート」、キャリア教育、知的障害、教員研修、様式改善